

# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1406

他に従属することはすべて苦しみである。自由（主権）はすべて楽しみである。（釈迦）

△解説▽苦しみとは「自分の思い通りにならないこと」である。私たちが自由にならない状態でもある。それは、束縛されていることであるから、苦しみである。この世界には束縛するものは少なくないが、自己の修養で克服できるのは煩惱（煩わし悩ます心のはたらき）である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.19 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1405

世界はどこも堅実ではない。どの方角もすべて動揺している。（釈迦）

△解説▽この文に続いて、自己のよるべき住所をもとめたのであるが、すでに「死や苦しみなどに」とりつかれていないところは見なかった、という。世間はどこも動揺している。この反省を通して、できることは何か。世間との関わり方において、自己の堅実性、安楽としての自己を探求することではないか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.18 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1408

つねによく気をつけて、自我に固執する見解を打ち破って、世界を空なりと観ぜよ。（釈迦）

△解説▽すべてのものは無常で縁起していることは、落ち着いて観察・反省するとわかるだろう。だから、他との関係を見捨てた「自分」という観念に固執するならば矛盾が生じる。世界は恒久的で固定的な実体を有していない、つまり空であると観ぜよと教えているのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.21 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1407

自分は一万年も生き永らうことになつてはいる、とでもいいたげな生活態度はとるな。死すべき者の避くるべくもない運命（死）は間近に迫つてはいる。（マルクス・アウレリウス）

△解説▽すべては無常であるといっている。だからどうするか。もちろん悲観的になれというのではない。無常であるからこそ、「命あるかぎり、よき者たることの可能であるうちに、よき者となれ」と述べている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.20 中村元記念館協力



# 中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村 元 慈しみの心 No.1410

ひとは変化を恐れるのか。変化なくしてなにが生じるといふのであるか。

（マルクス・アウレーリウス）

△解説▽無常は決して恐れるべきものではない。逃げようとしても、決して逃げられることではない。現実のあり方であるから。無常であるから、変化が生じてそこから苦しみも生まれるが、苦しみの克服も可能になる。楽しみもあり、また、心の平静を保つこともできるのでは。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.23 中村元記念館協力

## 中村 元 慈しみの心 No.1409

世間の人々は死と老いによって害せまられる。賢者は世のありさまを知って、悲しまない。

（釈迦）

△解説▽逃れることができない無常である現実。これをいかに超克すべきか。無常を人は身をもって受け止めないで、嘆き苦しむことが激しくなる。賢者は、無常の道理を正しく知る知恵を身につけている。日常的な無知（無明）を消し去らなくてはならない。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.22 中村元記念館協力

## 中村 元 慈しみの心 No.1412

之これを知るは之を知ると為し、知らざるは知らずと為す、是れ知るなり。

（『論語』）

△解説▽自分の知っていることは知っているとして、知らないことは知らないと答える。それが「真に知る」ということである。無知の自覚無知に「気づく」ことが「知」なのである。ソクラテスや釈迦によっても説かれているところ。『論語』でもこの反省はみられる。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.25 中村元記念館協力

## 中村 元 慈しみの心 No.1411

己を物に喪しない、性を俗に失う者は、之を倒置の民と謂う。

（『莊子』）

△解説▽わたしたちは、外的な物のうち、例えば高位高官などを自分の身に得るなど、本来的に自分の自由にならないことに心奪われて自己を見失う。そして、自己の本性を世俗のうちに喪失してしまうことが多い。これを倒置の民、つまり、さかだちした人間と呼ぶのである。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.24 中村元記念館協力



# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1414

ただここに注意すべきことは、仏教の修行者はただ無感動であることをめざしたのではない。彼らは世俗的な人間的な心情を超越するけれども、「法を愛するがゆえに泣く」のである。  
(中村元)

△解説▽執着のない冷たい個人を  
目指すのではなく、自己への執着が  
ないゆえに、他人とのあいだの隔て  
がなくなり、越えて、万人のために  
法を実現したいという、慈悲の心が  
はたらくのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.27 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1413

人間が執着をつくるのは、人間の眞実相を知らないからである。だから執着の根底には無知（無明）が存在する。  
(中村元)

△解説▽人の苦悩というものは執着にもとづいて生じる。それは眞実のあり方を知らないから、ものごとの眞相を明らかにすることができないから。例えばは無常なるものを無常と、正しく認識できないといった無明の状態。対するには明知が必要だ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.26 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1416

これらの人々は自我の観念に執着し、他我の観念に縛られている。ある人々はこれを知ることがなかった。またそれを「束縛の」矢であるとは見なかった。  
(釈迦)

△解説▽「私かなす」「他人かなす」という観念。対立するような自我と他我は、束縛の矢であり、一方の利益が他方の不利益を生む。自己を守ることが他人を守るようなかたちであれば、矢が刺さらない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.29 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1415

もしも自己を愛しいものであると知ったならば、自己を悪と結ぶなかれ。  
(釈迦)

△解説▽誰にとっても自己が愛しいのは当然である。では、自己を愛すとはどのような仕方になされるべきか。それは、悪をおこなわないこと。身体と言葉とところによつてする善いおこないが、自己を愛することにつながるのだと説明される。自己への執着と自己を愛することは異なる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.28 中村元記念館協力



# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1418

自己の利を思つて自己を抑えるのである。  
(釈迦)

△解説▽自己を制御せよと教える。ただ、むずかしいのは自己が自己を制御する点。別に自己があるわけではない。ここに実践、修養が必要になる。この言葉には2種類の自己が前提となつている。煩惱にとらわれた自己の側面と、それを克服しようとする自己の側面である。教えをもとに後者の自己を忘れることなく維持すべきである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.31 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1417

たとえば怒らない人は「自己と他人との利をおこなう」のである。  
(釈迦)

△解説▽怒りは猛毒のごとくである。自らを害し、同時に他の人にも危害を加えてしまうことになる。さらには、これまでの努力で積み上げたものさえも一瞬に破壊してしまう。この怒りを対処し制御することは、自らを守り、また他人にとつても利益をもたらすことは疑いない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.10.30 中村元記念館協力